

ペルシア書道は芸術性に富んだ書芸術だ。詩や文学作品を書く際には、最も美しいとされる書体のナスターリーク体を、速記にはシュキヤステ体を用いるなど、アラビア書道の一種でありながらも、独自の文化を発展させてきた。日本にも、アラビア世界と同様に書道が存在する。この二つを比較することは、地域や時間、文化などの背景の違いから難しいかもしれない。しかし、書の世界を広げるきっかけとして現代にも残る二つの書芸術の共通点と相違点を考察していきたい。

日本の書道は飛鳥時代に中国から伝来し、日本特有の表現を構築しながら紡がれてきた大切な日本文化の一つで、国の登録無形文化財にも登録されている。自己表現や芸術的表現を目的にしており、精神的な鍛練としても行われてきた。基本的には篆書、隸書、草書、行書、楷書の五体を用い、時には仮名を交えて、漢字仮名交じりとすることもある。これらは、書の目的や、与えたい印象に合わせて使い分けられる。また、道具である筆は毛筆で、多くの場合、動物の毛が用いられ、和紙に文字を揮毫する。

ペルシア書道はアラビア書道を基礎とする書道であり、その影響を強く受けている。そのため、アラビア書道が成立した十一世紀以降の成立であると考えられている。ペルシア書道は主にコーランの美的な筆写や、詩の美しさや響きを視覚的に表現する芸術としての役割を持つ。また、日本の書道と同じように、自己の表現と、精神的な鍛練、充足感の獲得も目的になっている。ペルシア書道の筆はアシの棒を削って筆にあった太さに自ら調節をする。日本で行われる際は竹で代用することもあるそうだ。

ここまで挙げたそれぞれの特徴として共通していたのは、「目的」の部分である。記録の技術や、字を綺麗に書くための書道、だけでなく、文字の造形美を追求し、芸術性を追求する姿勢はどちらにも共通していると言えるだろう。ここで、文字として視覚的な情報に残す意味を考えてみたい。文字として残された資料は信憑性が高く、当時のことを正確に知る手掛かりとなるため、現代人が歴史分野の研究を行う際には史料は調査の対象となることがほとんどだ。史料が時を超えた私たちに情報を伝えてくれているように、昔の人々の持っていた無形の情報を文字におこすことへの意義にも、おそらく、遠く離れた人にも正確に情報を伝えることが含まれていたのではないかと思う。何かを伝えることが目的だった「文字」を芸術の対象とすることは、実に興味深い発想であると感じた。一方で、相違点には道具があげられるだろう。一括りに「筆」と言っても、毛筆とアシの棒では材質や、描くことのできる線に大きな違いが出てくる。しかし、ペルシア書道は基本文字の形を習うことで作品制作に繋げることができ、書体がいくつもある日本の書道よりも、誰でも書きやすいという利点がある。

このように、日本の書道とペルシア書道はそれぞれ異なる地域と文化的背景の中で発展してきたが、根底には「文字を通して美を表現する」という共通した精神が存在していると言える。どちらも単なる記録手段を越えた芸術として、人々の感性を伝える重要な役割を担ってきたのだ。現代社会では、デジタル技術の発展により、手書きの文字に触れる機会は減少している。しかし、書道教室や展覧会を通じて、伝統的な書芸術への関心は国内外で高まりつつある。作品を通じて言語を超えた美しさや力強さを感じることができ、国や文化を超えた共感が生まれている。今後、こうした異なる書芸術同士の比較や交流を深めることは、単に技術を学び合うだけでなく、文字に込められた思想や感性を理解し合うきっかけにもなるだろう。特に、ペルシア書道の

優美で流麗な線と、日本の書道の多様な書体と精神性を組み合わせることで、新しい表現の可能性が広がるかもしれない。

伝統芸術は時代とともに変化しながらも、その本質を保ち続けてきた。書道もまた、現代の私たちの生活に新たな形で根付く可能性を秘めている。日本とペルシア、異なる二つの書芸術を見つめ直すことは、自文化を理解し、他文化への理解を深める貴重な視点になる。こうした比較を通じて、私たちは文字に宿る美と精神を改めて感じとり、未来へと繋げていくことができるのではないか。